

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

NG RICHARD WING TO

## 【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院 言語文化研究科

## 【研究題目】

「戦後日本における中国系亡命者による文芸活動の形成及びその影響」

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、日本を含めた海外での華人文学の実態を明らかにし、従来の「単一言語・一国史観」を超越することにある。特に比較文学や文化的越境の視点を用い、これまで解明されてこなかった在日華人亡命者の文芸活動の全体像を捉え、その世界文学における意義を浮き彫りにすることで、日本・中国文学研究への新たな知的貢献を目指す。さらに、陳光興(丸川哲史訳)『脱帝国』(以文社、2011年)では、アジア文化の実践が西洋文化への抵抗として示されるが、陳が参照した竹内好『方法としてのアジア』(創樹社、1978年)においても、中国系亡命者の言論や創作に関する言及はない。本研究は、アジア主義に関わりを持った中国系亡命者の作品を通じて、彼らの思想を解明し、陳の「アジアの主体性」論を補完する視座を提示するものである。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、比較文学的手法を通じて、中国系亡命者の文芸活動を多角的に分析する。対象とするテキストは、作品の内容とスタイルを左右する外的コンテキストの影響も重視しながら、人間関係や異国での生活様式、異文化への理解といった側面を通して、亡命者たちの執筆活動の背景とその影響を探る。資料として、対象作家の作品集に加え、自伝的作品、手紙、新聞記事、文芸雑誌、政府機関の内部文書などを幅広く収集し、分析を行う。

本研究では特に、中国大陸や台湾から日本に亡命した元対日協力者や日中ハーフ(中国系と日本の混血児)に焦点を当て、戦後日本における中国系亡命者の文芸活動の実態を多面的に捉えることを目指す。日本国内の資料のみでは解明が不十分であるため、対象者が滞在した中国大陸、台湾、香港などにおける足跡や文献も参照し、彼らの越境的な生活や創作活動の具体像を浮き彫りにする。同時に、従来の漢文学的な文脈と照らし合わせることで、彼らの文芸活動に見られる伝統の継承と新たな創造の様相を検証する。

具体的な研究内容としては、胡蘭成、景嘉、陶晶孫、邱永漢ら亡命者の足跡と業績の調査を実施し、国立清華大学の香港・台湾文学研究者の協力のもと、清華大学図書館、台湾大学医学部、基隆港務局、台湾国史館、台湾文学館などの機関での資料調査を行った。また、これら作家と香港の作家との交流については、香港中文大学の比較文化・思想史研究者と連携し、香港中文大学図書館の香港文学コレクションや香港大学図書館の植民地期新聞記事を調査した。また、一部の研究成果を日本台湾学会第21回関西部会(大阪、2023年12月23日)やThe 13th International Convention of Asia Scholars(インドネシア、2024年7月29日)で発表した。

## 【結論・考察】(400字程度)

本研究は、中国系亡命者と戦前のアジア主義を担った日本側の外務省関係者や、中国での生活経験を持つ漢学者との関係を通じて、1950年代の戦後初期における在日中国系亡命者の生活環境や文化的空間の実態を解明することを目的とした【図1】。当時の中国系亡命者に関する言説、日本人との文化交流、文芸活動を介した彼らのイメージ形成に着目し、日本、中国大陸、台湾、香港などの文芸界における影響についても検討を加え、戦後日本における中国系亡命者作家の群像を描き出した。

結論として、中国系亡命者作家は経済的には日本に定着する一方、創作面においては題材や形式に中国の伝統文学や思想(儒教・道教)を反映する傾向が認められた。このような創作活動は、自己や風景の発見に注目するリアリズムを基調とした中国と日本の近代文学の図式とは異なる。また、各作家の中国の伝統への関心の強さは、個々の漢文学の知識や亡命前の経歴とも密接に関連していることが示唆される。

図1

